

---

# ネギま！ 禁じられた魔法を統べる者

千日紅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギま！ 禁じられた魔法を統べる者

### 【Nコード】

N2145BA

### 【作者名】

千日紅

### 【あらすじ】

普通の魔法よりも巨大な力を持つ『禁断魔法』。その魔法を制御する青年は、やがて「立派な魔法使い」を夢見る天才少年と出会い、『禁断魔法』と向き合うこととなる。

## 第1話 平和が崩れた日

信じられなかった。

ありえないと思いたかった。

『アレ』を無闇に使おうとする奴なんて、いないと思っていたのに。

「マダ残ッテイタカ…愚カナ人間ヨ……」

『アレ』が宿った闇が俺を捉える。

恐い。逃げたい。『アレ』は、危険だ。

しかし、いつもいつも親から言われていた言葉が、俺を逃さなかった。

忘れるな、お前は『パンドラ』だ。『触れてはならないものを統べる者』なのだ

そう、俺は『パンドラ』。

人の欲望から『アレら』を封じ、管理し、統べる者。

己に課せられた大きな責任      今それを果たさずに、いつ果たすというのだ。

「  
N o s   a u t e m   e o r u m   f u t u r u m   s i  
t   v e r u m   m u n d u s   M I N E R V A (我、唯己が為に

未来、真理、世界を紡ぐ」

震える声で始動キーを口ずさむ。

この言葉の通り、俺がやるのは誰のためでもない  
俺が、明日  
を生きるため。

俺が、生きる理由を創るため。

そのためなら、いかなる痛みも甘受しよう。

今、『アレ』を封じることこそ、俺が生まれた理由なのだから。

## 第1話 平和が崩れた日（後書き）

オリジナル小説を放り出してやってしまいました。

出来れば、暖かい目で見てください。お願いします。

あと、始動キーのラテン語ですが、翻訳サイトで翻訳したものなので間違っけていてもスルーしてください。

重ね重ね、お願いします。

## 第2話 麻帆良学園にて

日本にある麻帆良学園都市。その中でも最奥にある女子校舎。

現在は昼休みのため、生徒たちが思い思いに過ごす中、職員室でひとり深々と溜息を吐く青年がいた。

名をパンドラ・リンドヴルム。魔法先生のひとりであり、理科を担当する教師である。

19歳でありながら群を抜く秀才であり、同時に魔法使いでもあった。

イギリス出身の彼が、何故日本の学校で教師をやっているのかというところ

「何か悩んでいるのかい？ パンドラ君」

「……高畑先生」

薄い微笑を浮かべ彼に声を掛けてきた渋いオジサマ 2・A担任

で英語担当教師、タカミチ・T・高畑のおかげなのだ。

10年前、ある事件で家を失った彼を、偶然知り合った高畑が引き取ったのだ。

「ああ…大変申し上げにくいことなのだが、どうにも2・Aの授業だけが上手くいかなくて。もう就任してから2年経とうとしているのに情けないことだと……」

高畑から若干目をそらしつつ話す。彼が担任を務めるクラスへの愚痴を言うなど失礼にもほどがある、ということと同時に、自分自身副担任をしているクラスが一番上手く授業が出来ないなどただの恥にほかならないからだ。

「まあ、あのクラスはいろいろと特殊だからね…」

そう、特殊なのだ。あのクラスは。

忍者やピエロ、ロボットに魔族と人間のハーフ、果ては吸血鬼の真祖。

もちろん普通の人間も存在しているのだが、彼女らはどうにもはっ

ちゃけていて、なかなか授業が上手く進まないのだ。

「特殊といつても、あそこまでいくと珍獣園だ」

ぼそりと呟いたパンドラの言葉に高畑は苦笑する。彼は手にしていた茶を啜ると、次いで話を変えた。

「今日の放課後は小テストの補修だと聞いたぞ。大丈夫かい？」

「いいえ…また2 - A レンジャー バカ五人衆の相手だ。あいつらは私をおちよくっているのだろうか…」

「アスナ君は素で出来ないから、なんとも断言しにくいね」

神楽坂明日菜。

綾瀬夕映。

佐々木まき絵。

長瀬楓。

古菲。

クラス別成績で万年学年最下位の2 - Aの中でも特に成績の悪い五人。ゆえに、バカレンジャー！。

その中で綾瀬はやればできるのだが、結局やらないので結論は一緒なのだ。

はあ、と再びパンドラが深い溜息を吐くと、昼休みの終わりを告げる予鈴が鳴った。

「じゃあ、僕は次授業だから、行くよ」

「…すまない。愚痴に付き合わせてしまった」

「気にするな。頑張れよ」

颯爽と職員室を高畑は後にする。

その姿勢のいい後姿を見ながら、パンドラはもう一つ、深い溜息を吐いたのだった。

### 第3話 バカレンジャーと放課後

放課後、気乗りはしないがこれも教師の仕事だと自分を納得させ、2-Aの教室へと赴いたパンドラ。

今日の居残りはバカレンジャーの五人と龍宮真名、桜咲刹那。

「さて、さつさと追試始めるぞバカ五人衆とプラスアルファ。いつもの通り10点満点中6点で合格だからな」

宣言し、用意してあったプリントを手渡す。

すると、龍宮と桜咲、綾瀬があつと言う間に持ってきた。

さらつと採点をするると三人とも10点満点。

綾瀬はいつもの如く小テストはやる気が無く勉強しなかったから落ちたに違いない。

だが残り二人は成績優秀とはいかずとも一通り点は取れていたはず

さては、また仕事とかで勉強をしなかったな。

「三人とも合格。だが龍宮と桜咲は残れ」

「……!!」

「う”っ」

すたすたと退室していく綾瀬。プラスアルファ組はパンドラの言葉に頂垂れた。

その後、長瀬と古が提出。

長瀬は7点、古は5点だった。

「長瀬合格。帰って勉強しろ」

「まあ、善処するでゴザる」

「やれ。古、お前は不合格だ。もう一回」

「そんなッ!? ううゝ…次こそ合格アル!」

小テスト本番前にそのやる気を出せばいいものを。

軽く溜息を吐き、別バージョンのプリントを渡す。

今度は佐々木、神楽坂、そして再チャレンジの古が出してきた。

「佐々木4点、神楽坂3点、古6点」



「え!？」

「うそっ」

「やったアル〜！」

嬉々として古は帰って行き、若干落ち込みながら佐々木と神楽坂は再び問題に取り組む。

10分ほどの間のあと、佐々木が提出。

「どーですか、センセ？」

「8点、合格だ。お前ももっと勉強しろ」

「にやはは〜。気が向いたらね〜？」

そう軽やかに笑って佐々木も帰った。

残るは一番の難関 2-Aのバカ、神楽坂明日菜。

「どうだ、神楽坂」

神楽坂の手元を覗き込むと、パンドラは一瞬硬直した。

「…お前、白紙かよ」

ギツと涙目になりながら神楽坂は呆れる青年教師を睨んだ。

「まったく…ヒントをやるから、やれるところまでやってみる」

それから30分後、ようやく神楽坂も合格し帰っていった。

気疲れが襲ってくるが、まだやるが残っている。

「さて。何故私がお前たちを残したのかは、当然分かっているんだろっな？」

教室に残っている二人 龍宮と桜咲は素直に頷く。

「お前たちの仕事柄、忙しいのは私も承知している。だがそれでも学生というのは勉強が本分だ。よって、今度小テストで不合格だった場合、次の試験まで強制的に仕事は休業にさせる」

「な…！ それはさすがに勝手というものではないですか、先生！」  
桜咲が声高に抗議するが、パンドラは淡々と返す。

「この話についても学園長も高畑先生も承認している。言っただろう？ 学生は勉強が本分だと」

龍宮はわずかに目を鋭くしてパンドラを見据える。

「それなのに勉強ができない、しないことを仕事で言い訳をするの

は本末転倒だと                    そう言いたいのか？」

「その通り」

視線での抗議も意に介さず、パンドラは座っていたパイプ椅子から立ち上がり、黒板の文字を消す。

龍宮はマイペースな教師に、なおも声を掛ける。

「先生。だとしたら私たちは今すごく困った状況にあるのだが」

パンドラは無言で続きを促す。

「これから私たちは仕事なのだが」

転けて黒板消しを床に落とす。舞い上がった粉で彼は盛大にむせた。

「ごほっ、ごほっ…。な、何!？」

むせながら驚いている間に、律儀にも桜咲は黒板消しを拾い、教壇の上に置くと、箒とちりとりを持ってきた。

粉を掃き集める桜咲を尻目に、龍宮は説明を続ける。

「パンドラ先生も知っているとは思いますが、明日2 - Aは高畑先生の英語の授業で小テストがある。しかし私たちはこれから魔物退治に出かけなければならない。そして仕事があると私たちは大抵2時頃にならんと帰ってこれないんだ」

「けほ、だから、何だと？」

「パンドラ先生に助力をお願いしたい」

突然軽く目眩がしてふらつく。なんとか体勢を立て直すと、龍宮を見返した。

「…それは、本気で言っているのか？」

「無論」

なんということだ。

パンドラは未だに少しふらつく頭を押さえて心の内で悪態を吐く。  
まさか自分でこんな面倒な事態を招いてしまうとは                    !

しかし生徒に「やれ」と言っておきながらここで引き下がっては、教師として示しがつかない。

「                    分かった。私も協力しよう」

ようやく目眩が収まった顔を上げ、自分を面倒事に巻き込んでくれ

やがった生徒二人を見据えて言った。

## 第4話 太刀と魔法と拳銃と

生徒二人の仕事に協力することになり、やって来たのは麻帆良学園から10キロほど離れた林。

既に午後7時を過ぎており、暗くなっていた。

「先生、魔物を直接叩くのはわたしたちがやりますので、援護をお願いできますか？」

「もちろんだ。任せろ」

桜咲は野太刀、龍宮は拳銃を構えた。

龍宮は何も持っていないパンドラに問う。

「パンドラ先生は杖とかを使わないのか？」

「杖はただの補助道具だからな。私は特に必要としない」

魔法使いといえば杖、というイメージがあるが、魔力があり呪文を唱えられれば、魔法を使うことが出来るのだ。

会話をしている間に人ならざる気配が集まってきていた。

「お出ましのようだな。桜咲、龍宮、準備はいいか？」

「問題ありません」「ああ」

「では　いくぞ！」

木陰から異形　魔物が飛び出してくる。

桜咲は一振りで三体を切り裂き、龍宮は拳銃で次々と撃ち抜いていく。

「Nos autem eorum futurum sit  
verum mundus MINERVA  
Fluxa atque fragilis Nullam se  
(脆く儚い我が身を護れ)、『安らぎの園』！」

頭上から飛びかかってきた魔物たちを防御魔法で弾く。

更に、無詠唱で氷の矢を五本飛ばし、五体を貫いた。

その間に桜咲と龍宮は数十体も倒しているのだが、魔物たちは次から次へと出現してくる。

「なんでこんなに魔物がいるんだ！？ 誰かが召喚でもしているのか！？」

真つ正面から突撃してきた約十体の魔物を再び『安らぎの園』で弾く。

「くっ…分かりません！ ですが、恐らく今周りにいる二十体ほどで終わりかと思います！」

「おいっ、パンドラ先生！ 何か敵を一掃できるような魔法はないのか！」

「援護しろと言ったのはお前たちだろうが！！」

龍宮のセリフに腹を立てたが、確かに状況は不利だ。

「仕方ない」で使いたくはない だが、自分には教師として生徒を守る義務がある。

数瞬躊躇った後、今回だけだ、と自分に言い聞かせ、魔法陣を展開する。

「Sed verum ad praeteritum, nec futurum est verum cognoscere

(真理無き者に過去は無く、真実知らぬ者に未来は無い)

Omnes sciunt, in desperationem, et ab initio (全てを知り、絶望し、消えよ)！

Vestibulum recessus (禁断解放) 真

理の刃』！」

白銀の光が魔物たちに降り注ぎ、貫いていく。

桜咲と龍宮はその光景を啞然として見ている。

やがて、光が収まったとき、そこには魔物は一体として存在しなかった。

パンドラは魔力を大量消費した疲れからくる息切れをなんとか整えようとして、むせた。

「げほっ、ごほっ！！」

「せ、先生！？ 大丈夫ですか！？」

桜咲は心配して彼の背中を擦る。龍宮は呆れ顔で未だむせ続ける彼

を見た。

「　　かつこ悪いな、パンドラ先生」

「うるさい！　　げほっ」

時刻は8時半過ぎ　　既に辺りは真っ暗で、時折吹く風がひどく冷たい。

「それにしても、先生はあんな魔法も使えたんですね。知りませんでした」

「当然だろう、あれは禁　　普段使う必要のない魔法だからな」  
パンドラは危うく言っではいけないことを言いかけ、慌てて言い直した。

言っではいけないこと　　それは、巨大な力を宿し制御が難しいため、使用はおろか習得すら禁じられた魔法、『禁断魔法』のこと。パンドラは訳あって『禁断魔法』を管理しているが、それを公言することも使用することもしてこなかった。

何故なら、人間は手を触れてはいけないと分かっている、時には己の私欲のために禁忌に触れようとする生き物だからだ。

そんな人間に彼が『禁断魔法』を管理していることが知れば、双方ともただでは済まないだろう。

ゆえに彼は隠してきたのだが、今回彼が使用したのが『禁断魔法』と分からないようだとはいえ、二人もの人間の前で披露してしまうのだ。

彼は攻撃用の魔法はあまり多くは習得しておらず、今回のことは不可抗力とも言えるのだが、彼の心中は複雑だった。

「本にな。先生があんな魔法を使えると最初から知っていれば、援護などさせずに一網打尽にしてもらったものを」

「何都合の良い事を言っている、龍宮。そういうのを望むのなら行き当たりばったりで私に頼むよりも、高畑先生なり他の魔法使いなりに相談しておけばよかったんじゃないのか」

パンドラが龍宮に言い返すと、彼女と桜咲はぴた、と歩みを止めた。

「そうか、その手があったか…」

「…そうでしたね。失念していました」

「……阿呆か」

では次はあしよう、こうしようと会議を始めた彼女らを見て、『禁断魔法』について口止めをしようかと考えたが、彼女らは『禁断魔法』だと分かっているようだったので、逆に口止めしようとする怪しまれるだろう。

(…ま、今回はいいか。何かあれば記憶を消すなりすればいい) 心の中で結論付けると、大きく欠伸をした。

満天の星空が、いつもよりも綺麗な気がしたのは果たして気のせいだったのだろうか。

## 第5話 嵐の予感

桜咲と龍宮の仕事に付き合わされてから一週間、ほとんど何事もなく過ごしたパンドラ。

平和な日々には満足していたが、いわゆる「嵐の前の静けさ」なのではないかと少し不安になってもいた。

今日も全ての授業が終わり、職員室で茶を啜りながら一息ついていると、高畑がやってきた。

「今日もお疲れ、パンドラ君」

「高畑先生、早いな。ホームルームはもう終わったのか？」

「まあね。伝えることを伝えて終わりだから」

さすがだな、と言呟いて再び湯飲みを傾ける。

そんな彼の前で、高畑は爆弾発言じみたセリフを投下した。

「パンドラ君、突然だけど明日から教育実習生が来るよ」

「ぶっ……はあ！？ この時期にか！？」

パンドラは驚いて茶を吐き出しかけるも踏みとどまり、高畑に詰め寄った。

「厳密にいうと、イギリスのメルディアナ魔法学校を首席で卒業した子が、最終課題で日本で先生をやるんだ」

「ふーん…修行というものか……って、『子』？」

『人』でも『彼』でも『彼女』でもなく、『子』。

「こ、子供が来るのか？」

「ええと…確か、十歳だったかな」

「十歳………！！」

最悪だ。目眩がしてきた。

パンドラは子供が嫌いだ。騒ぐし、わがままは言っし、言うことは聞かないし、物を知らないし、いつでも自分が正しいと思っている。世界は善と悪 白と黒で割り切れると思っている。

最後の点については今の魔法使いたちにも言える。



正義の魔法使いだの悪の魔法使いだの、お前たちは子供なのか、そうなのかと問いただしたい衝動に駆られたことが何度あったのか。「おーい、大丈夫かい？」

「あ、ああ…すまない」

嵐だ、嵐がくるぞ。とてつもない嵐が。

凄まじいほどの嫌な予感を胸に抱え、パンドラは頭痛もしてきた頭を押さえた。

翌日、頭痛薬を飲み下し、職員室で大人しくしていると、女子の叫び声が聞こえた。

「取り消しなさいよー!!」

この耳障りな叫び声は恐らく2 - A - のバカ、神楽坂明日菜のものだろう。

その後、高畑が窓を開け、下にいる者たちに何かを言ったと思ったら、パンドラを招いて外へと出た。

そこにいたのは神楽坂明日菜と学園長の孫娘、近衛木乃香。

そして、小さい、眼鏡を掛けた子供。

「はじめまして、本日付けで英語授業を担当することになりました、ネギ・スプリングフィールドです」

この出会いから、パンドラは否が応でも長い戦いに巻き込まれることになったのだ。

## 第6話　ひと時の追憶

神楽坂と近衛、そしてネギ・スプリングフィールドが学園長室で話をしている間、パンドラはその部屋の外で待機していた。

高畑の話によると、その子供は高畑に代わって3学期中2・Aの担任と英語の教師をするという。

パンドラは副担任としてその子供をサポートすべきなのだが、学園長の話まで一緒に聞く必要はないだろうと言って辞退したのだ。

子供の魔法使い、ネギ・スプリングフィールド。

あの「サウザンド・マスター」、英雄ナギ・スプリングフィールドの息子。

だが、あの男の息子と言ってもまだまだ未熟のようだ。

つい先程、クシャミで神楽坂の制服を吹き飛ばしたので分かる。あれはクシャミで武装解除の魔法の暴走によるもの。

魔力はなかなかだが、そのような暴走を起こすのは未熟である証だ。しかし、あの子供の目標はしっかりしている。

「夢」　　といわれるもの。それを真つ直ぐにあの子供は持っている。

鬱陶しいのと同時に、正直羨ましい。

自分があの子供と同じような歳のときには、「夢」だの「希望」だの言っている場合ではなかった。

パンドラは今となつては遠い昔だが、鮮明に覚えている記憶を思い起こした。

「いいか、パンドラ。お前は『パンドラ』なのだ。何時如何なる時

もそのことを忘れるな」

同じような言葉を一体何度言われたことだろう。

最初こそ責任を感じ、決意を込めて頷いたものだが、5年ほどするとさすがにうんざりしてきて、適当に相槌を打っていただけだった気がする。

『パンドラ』。

それはただの名前ではない。リンドヴルム家において、最も重要な意味をなす名前。

以前は父が『パンドラ』だったらしい。

じゃあ今、父さんは『パンドラ』じゃないの、と聞いたら、父はひどく優しい笑顔で、お前が『パンドラ』だと言うのだ。

その時はまだ、『パンドラ』とは何か、よく分からなかった。ただ単純に己の名前というだけではないというのは漠然と感じていた。

『パンドラ』の意味を知ったのは、10年前。

そして、いかに『禁断魔法』が危険で、人間が欲深いのかを知ったのも10年前だった。

リンドヴルム家は10年前に無くなった。

ある『禁断魔法』の暴走でパンドラ以外の全員が殺されたのだ。

後々その事件について調べると、誰かが自分のため 私欲のため

に『禁断魔法』の封印を解いたらしい。

その誰かは分らない。だが、『禁断魔法』は厳重に封印してあった。

それこそ、リンドヴルムの者しか分からないようなもので。

つまり、それから導き出される答えは一つ。

『禁断魔法』の危険性を知っているはずのリンドヴルム家の誰かが、私欲のために封印を解いたのだ。

そんな馬鹿な、とパンドラは認めたくなかったが、それが一番正しいのだ。

愚かな人間。間違っていると分かっているながらも禁忌に触れようと

する。

必死に自分を正当化して、他人の忠告から耳を塞いで。

間違いを侵せば、ああ、間違っていたと悔やむだけ。

そして同じことを繰り返す。

正義だと大声で宣つても、悪だとふんぞり返つても、何ひとつ変わりはしない。

それが10年前にパンドラが思い知った事実だった。

扉の開く音で意識を現実に戻すと、女子二人があつと言う間に走っていった。

廊下を走るなど何度言っても分からない奴らなので、彼は既に注意するのを諦めている。

それでもう一人、小柄な人間      ネギ・スプリングフィールドが出てきた。

「あ…あの、タカミチと一緒にいた人ですよ、はじめまして」  
ぺこりと丁寧にお辞儀してくる。あの英雄と違って、態度はしっかりしているようだ。

「ご丁寧にも。私はパンドラ・リンドヴルムだ。2-Aの副担任で、お前のサポートを命じられた」

そう、サポートという名の子供のお守り。面倒なことこの上ないが、これも仕事だ。

聞いた話によると、大学卒業程度の学力はあるという。

知識については問題はないようだ、子供だ。

行き先が不安で、パンドラは大きく息を吐いた。

## 第7話 闇の福音のお茶会

ネギとともに2・Aに着いたはいいが、やはりというかトラップの割には可愛いものが仕掛けてあった。

黒板消しトラップや上から水入りバケツが降ってくるような罠。

ネギはまんまと全てのトラップに引っかかり、パンドラはその惨状を見て酷くなるばかりの頭痛で目を背けた。

「ええー！？ 子供お！？」

慌てて目を回している子供に駆け寄る生徒たち。

次いでパンドラに「これが先生ですか！？」と言外に信じられない！というニュアンスを含めて聞く。

うそお、とか可愛いー！とか女子特有の高い声が飛び交う中で、パンドラは耳を塞ぎながら嘘だったらしいのにな、と半ば本気で思っていたというのは余談である。

その後、背が小さいから黒板の高いところに手が届かないだの、何故か神楽坂がネギに消しゴムの欠片をぶつけまくっただの、いきなりクラス委員長・雪広あやかと神楽坂が喧嘩を始めるだの、結局授業らしい授業ができず大失敗だった。

昼休み。

本日の午後に彼担当の授業は無いので、のんびりと過ごしていると2・Aの生徒である絡繰茶々丸がやってきた。

「パンドラ先生。少しよろしいですか」

「絡繰か。どうした」

絡繰茶々丸はロボットだ。工学と魔法を併用して造られたと以前聞いたことがある。

「マスターがお呼びです。パンドラ先生にお聞きしたいことがあるとのことですよ」

マスターと聞いて驚く。最近は彼女と特に話はしていなかったからだ。

しかし生徒という身分で教師を呼び出すとは、何かおかしいのではないか。

ぶつぶつ言いながらも、彼はその申し出を承諾したのだった。

二人が向かった先は屋上だった。

屋上に着き、彼が一番最初に目にしたものは、屋上の真ん中にデンと置かれた、丸く品のあるテーブルに添えられた椅子に足を組んで座り、誰かが見ている訳でも無かっただろうに偉そうに紅茶を飲んでいる金髪幼女の姿だった。

「おお、来たか。パンドラ」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル：お前、こんなところで何をしている？」

「見てわからんか、茶会だよ」

言葉を失って立ち尽くしていると、絡繰に促され、テーブルに添えられたもうひとつの椅子に座った。

「エヴァンジェリン、私を呼んだのは茶会を催すためではないだろう。何を聞きたい？」

精一杯優雅を意識しているような仕草で紅茶を飲むエヴァンジェリンに問う。

「ふむ。そう聞きながら貴様も大体何について聞かれるか、予想がついているのではないか？」

そう言いながら金髪幼女はパンドラの銀瞳を覗き込むように見る。

外見に似合わず古風な言い回しをし、何かと偉そうな少女。

エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエル。

「闇の福音」や、「不死の魔法使い」「童姿の闇の魔王」などと呼ばれ、吸血鬼の真祖であり、実に600年生きているとされる少女。そして絡繰茶々丸のマスター。

実際、19年しか生きていないパンドラを彼女から見れば、ただの赤子と同じレベルなのだろう。

しかし、今彼女は生徒で、パンドラは教師。

それを分かっていないのか、それとも分かっているにも気にしていないのか　彼女の性格から考えるに、明らかに後者だが。

そんな雑念を仕舞い込み、パンドラはエヴァンジェリンとの会話に集中する。

「ネギ・スプリングフィールド、か？」

にや、とエヴァンジェリンはその童顔に似合わない悪魔のような笑みを浮かべる　正解のようだ。

「そう。あのガキのことだ」

「……そんなに初恋の人が気になるのか？　いい年して頑張るな、お前」

「なっ、ななな、なぜそうなるっ!!」

「分かりやすいな、お前」

エヴァンジェリンの初恋の人とは、ネギの父、ナギ・スプリングフィールドのことだ。

彼女が麻帆良学園に通っているのもあの男が関係しているらしい。

「貴様っ！　さてはカマを掛けたな!？」

「見事に引っ掛かってくれてありがとう。案外単純なんだな」

「ええい、普段素直に謝らんのに、こういうときに素直に謝るでないッ!!」

ある場所ではなまはげと同じような扱いをされているような彼女に、パンドラは遠慮も何も無く言う。

彼女はパンドラがこの学園に来たとき、最初に打ち解けた相手だっ

たのだ。

打ち解けた、というか、彼女の事情を知ったパンドラが、面白がっているいろんなことを問い詰めただけだったのだが。

始めは鬱陶しそうにしていた彼女も、パンドラの持つ魔法に関する知識や様々な物に向ける好奇心を認めてだんだんと多くのことを話すようになったのだ。

いつだったか、うっかりエヴァンジェリンは初恋の相手のことを口に出してしまい、それ以来事あるごとにパンドラにネタにされ続けているのだった。

彼女は昔からそのネタになると慌てふためく。

普段の彼女とのギャップが激しく、微笑ましいくらいだと考えて、思わずパンドラは薄く笑んだ。

「笑うなっ、パンドラ！」

バン、とテーブルをエヴァンジェリンが思い切り叩くと、上に置いてあったものが一瞬中に浮いた。

その後、完全に気を損ねたエヴァンジェリンがパンドラに右ストレートをお見舞いするも軽くないなされ小馬鹿にしたような顔で笑われた、というのは別の話。



## 第8話 「課題」

「 学園長、私に何の用があるんだ? 」

ネギが麻帆良学園に来てから数日。

何やらいろいろとあつたらしいが、特に大きな出来事は何もなく比較的平和だった。

そんな中、期末テストまで後一週間というときにパンドラは学園長・近衛近右衛門から呼び出された。

テスト作成とひっきりなしに質問をしにやってくる生徒たちを相手にしていて、最近は酷く疲れているのだ。

目眩や頭痛こそまだ発症していないものの、睡眠不足で機嫌が悪いゆえに、少しでも早くやることをやって、仕事を終わらせたいというのに呼び出し。

表面こそ平静に見えるが、心の中では罵詈雑言が渦巻いている。

「うむ。ひとつ聞くが、お主から見てもネギ君をどう思う? 」

「どう思うと仰られても…頑張っているのではないか? 」

パンドラの返答に、学園長はふむ、と頷く。

まったく学園長が何をしたいのか分からず、心の内で不機嫌メーターが上昇する。

「何が仰りたいのだ、学園長」

「ようはな、立派な魔法使い候補である彼に、ひとつ課題を与えようと思ったのじゃ。パンドラ君にはネギ君に伝達を頼みたい」

立派な魔法使い（マギステル・マギ）。

正義を御旗に掲げる魔法使いたちが憧れる、世のため人のために魔法を使う魔法使い。

パンドラは別にそんなものに興味はない。

だが、正義を至高とする者達にとってその称号は何ものにも変え難いものだということを知っている。

そしてそれと同時に奴らの多くは「魔法」というものを甘く見てい

るということも知っている。

奴らは知らないのだ。いかに「魔法」というものが人の心に左右されるかを。

「…その課題とは？」

「パンドラ君も2 - Aがクラス別成績で万年最下位だということは知っているじやろう？彼には2 - Aを最下位から脱出させてほしいのじゃよ」

「それはまた……無茶苦茶な課題ではないか。個人での成績ではトップ3が揃っているが、ワースト5も皆揃っているぞ」

件のバカレンジャーは幾らやっても成績が伸びない。よく見捨てもせず毎回補修をやっているものだと思っ自分でも思う。

「そこはネギ君と生徒たちの頑張り次第じゃの。うまくいけば教師として正式採用を考えておる」

フオフオフオ、と言うだけ言って呑気に笑う爺。なぜだろうか、今非常にこの洋梨頭を殴りたい。

「用件はそれだけか？ ならば私はもう行くぞ」

「まあ待て、用はもう一つあるのじゃ。もう一つは、お主も関わることじゃ」

「…何？」

背を向けかけた体を再び学園長へ向ける。

どういふことか、と半ば睨むようにして目の前の老人を見る。

「ネギ君のもう一つの課題はお主に試験官をやってもらいたいのじゃ」

「…もう一つ、だと？ 一つで充分ではないのか？」

「恐らくネギ君は正式採用されるじやろう。問題はその後じゃ。ネギ君は大なり小なり苦勞はあったようじゃが、全てが上手くいっておる。このままではいけないのじゃよ」

「世の中には失敗もある、上には上がいる それを分からせるための課題だというのか？」

「フオツフオツ、理解が早くて助かるわい」

この意見には賛成だ。どんなに真面目な人間であろうと、こうも成功が続くと天狗になるものだ。

だが、この話を今するのはあまり適切ではないだろう。

「私に異存は無いが、学園長、なぜネギ・スプリングフィールドが最終課題をクリアし、正式採用されると思っている？単なる希望的観測か？それとも何か根拠でもおありなのか？」

「うむ…両方じゃの」

そうだった。こいつはそういう人間だった。人間を理屈抜きで信じられる人間。

それがどうにも理解出来ず、出会った当初はイライラしていた。

「はあ…。では、学園長。その“ネギ・スプリングフィールドが正式採用された後にやる課題”で、私は一体何をすればいい？」

「一言で言つと、決闘じゃ」

「なっ…け、決闘！？学園長、本気なのか！」

「もちろん。本気と書いてマジと読むくらいにな」

数日ぶりに目眩と頭痛が再来してきた。将来自分の死因は案外目眩や頭痛だったりするのではないかと最近よく考えるようになった。

「学園長も知っているとは思うが、私が得意なのは結界と捕縛と探知だ！攻撃用などほとんどないんだぞ！」

「だからこそ、今の内に知らせたんじゃよ。準備期間じゃよ、準備期間」

そんな無茶な。

「準備期間をもつけるくらいなら、高畑先生や学園長ご自身が相手をすればいいだろう！」

「わしらは忙しいんじゃ。これも副担任の仕事じゃよ、パンドラ先生」

ここで副担任という立場を持つてくるか。わざとらしく先生とまでつけて      とことん喰えない爺だ。

だが、学園長の次の言葉で、怒りで温度が急上昇していた心が一気に凍てついた。

「まあ、事と次第によつては、『禁断魔法』の使用許可も出すぞい」

「黙れ!!」

突然の怒鳴り声に、学園長は瞠目する。

「使用許可も出す、だと？ お前に、お前たちに『禁断魔法』を使うか否かを決める権利があるとも思っているのか？ はっ、勘違いも甚だしいな！ 決めるのはお前たちではない。『パンドラ』であるこの私だ！」

こいつらは分かっていない。『禁断魔法』という存在を。

自分たちの都合で生み出しておきながら、管理することも責任を取ることも放りだしたこいつらは、何も分かっていない。

「…お主は『禁断魔法』を使うことを嫌っておつたな。じゃが、なぜ数日前使ったのじゃ？」

「あれは私の教師としての判断だ。守れる生徒を守らないで、教師が務まるか。ここで咎められるは、『禁断魔法』を使用した私ではなく、仕事とはいえ生徒を駆り出さなければいけないまでに、事態を悪化させたお前たちではないのか？」

学園長は沈黙する。あくまで肯定しようとしないう学園長に、いい加減堪忍袋の緒が切れそうだ。

「とにかく、お前たちの指図は受けない。確かに高畑先生には世話になったからな、感謝はしている。だが、それとこれとは話が別だ。私はお前たちを否定はしないが、決して肯定もしない」

忘れるなよ、正義の味方気取りさん　と、言い残し、パンドラは靴音高く退室した。

パンドラが退室し、静けさが室内に漂う中で、学園長は短く嘆息した。

「今代の『パンドラ』は、一際意志が強いのお」  
その独り言は、誰にも聞かれることもなく空気に溶けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2145ba/>

---

ネギま！ 禁じられた魔法を統べる者

2012年1月12日22時52分発行